令和５年12月９日（土）掲載
神奈川新聞社提供（複製禁止）

海外リポート

中国

横浜市上海事務所所長
浦井　将文

上海と友好都市50年

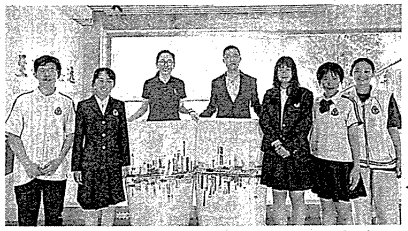
今年、横浜市と上海市との間で友好都市提携50周年を迎える。節目の年を記念して、横浜市役所のアトリウムでは横浜上海友好委員会が主催となり９月24日から28日にかけて「上海ウィーク」が開催された。これまでの交流を振り返るとともに、中国伝統の踊りや音楽が披露されるなど、イベントは盛況を博した。

１９７３年11月30日に横浜市と上海市は友好都市の提携を宣言した。あまり知られていないことだが、上海市にとって世界で初めて提携した海外友好都市が横浜市だ。提携を契機に行政のみならず、市民や学校など多様な主体が文化や芸術、スポーツなど、さまざまな分野での交流を積み重ねてきた。

上海市では昨年前半に約２カ月に及ぶ都市封鎖が実施されるなど、新型コロナウイルス感染症の影響がまだ色濃く残っていたものの、後半からはそうした規制も緩和されていった。現在は繁華街や観光スポットにおいて平日でも混雑している様子が見受けられる。

一方、日中間の往来はコロナ前と比べて道半ばの状況にある。特に日本から中国の訪問に関しては、航空便の復便遅れやビザ取得の必要など、複合的な要因が依然として障壁となり、厳しい状況が続いている。

当事務所では相互の往来がそうした厳しい状況下でも、オンラインを活用することで交流の継続を模索している。その一例が次世代育成の一環としての「高校生オンライン交流会」だ。横浜市と上海市の友好校を中心にして昨年末から実施している。



オンライン交流会に参加した上海市外国語大学付属外国語学校で50周年記念ポスターを掲げる様子

本年度は横浜市から、みなと総合高校（同市中区）と南高校（同市港南区）の２校が参加し、上海市の同年代の高校生とオンライン上で自分たちの都市の魅力を発表したり、少人数に分かれて学校生活や日常のはやりといった身近なテーマを話したりした。交流をきっかけに互いの都市を知り、海外に目を向ける機会を設ける狙いがある。

こうした機会は高校生たちから好評であるものの、他方で「リアルで交流したい」という声が少なからず出ている。オンラインの良さを生かしながらも、交流に関しては面と向かったリアルに勝るものはないと感じている。

当事務所としても、これまで50年続いている都市間交流の歴史をこれからの世代につないでいくことで、日中の橋渡しの一助となるべく引き続き努力していく。